

保育あきた瓦版

第53号 平成30年 7月 19日 秋田県保育協議会 広報委員会

第46回 秋田県保育研究大会 特集



第46回秋田県保育研究大会を振りかえって

秋田県保育協議会副会長 澤口 勇人

キャッスルホテル能代の会場を埋め尽くす全県から集まった保育関係者。そんな熱気に包まれた雰囲気の中での第46回秋田県保育研究大会能代大会開会式を、私はステージの上からある種の高揚感を感じながら見守っていました。「秋田市以外での開催で、参加者が400人を超えることは難しい」間もなく開催回数が半世紀を迎える歴史ある秋田県保育研究大会は今までそう言われてきました。しかし、今年の能代大会は違っていました。それは確かに今回の秋田県保育研究大会がキャリアアップ研修として認められたことによる効果も大きかったとは思いますが、それだけではなく保育に携わる人たち全員に、研修を受けることによって保育の質を上げていこうとする気持ちが根付き始めているからなのではないかと感じています。

さて、今回の保育研究大会においては運営上大きな変更がありました。それは保育研究大会のメインとも言える各園が研究の成果を発表する分科会において、発表するテーマを発表者が自由に選べるようになったということです。このことについては一見小さな変更のようですが、これまでのように自園に発表の順番が回ってきたということで、決められたテーマの中から適当なものを選んで新たに研究をはじめると比べて、普段から興味を持って取り組んでいることを発表できるという意味においてとても大きな改革だったと感じています。実際に秋田県保育協議会の執行部としては、このような“当たり前のこと”に変えるために関係各所との調整を計り、数年の歳月を費やしてこの方式に至ったものです。そして、今回の大会では早速その効果が現れたのか、各分科会の発表内容はこれまでにないほど質が高く、その後の分科会での熱のこもった質疑応答、グループ討議と大いに盛り上がったとの報告を受けております。そのため分科会終了後の選考委員会においては、どの発表も優れた出来であり差が無く、全てを北海道・東北ブロック保育研究大会に推薦してはどうかとの意見も出たほどでした。

現在、保育業界には取り組まなくてはならない課題が山積しています。私たち保育に携わるものは、これらの諸問題に立ち向かいながらも、当然のこととしてまずは目の前にいる子どもたちの最善の利益を実現するために、一人一人の保育者たちが真摯に保育を学び保育に取り組んでいかなければなりません。是非ともキャリアアップ研修を通じて保育の質の向上を目指していきましょう。

最後になりますが、能代山本地区の皆様には、今回の保育研究大会を無事成功裏に終わらせていただいたことに対してこの場を借りて感謝の気持ちを表します。本当にありがとうございました。そして、来年は第47回秋田県保育研究大会が由利本荘市で開催されます。同地区の皆様も準備作業で大変なことと思いますが、今回同様実りのある保育研究大会になるよう期待しております。

第46回秋田県保育研究大会を振り返って



第46回秋田県保育研究大会
大会実行委員長 金子 日登美

参加者総数424名。当初、宿泊施設の確保から始まり大会人数に対応できる会場を確保できるかなど、今だから言える地元開催への道りは楽なものではありませんでしたが、全県から多数の保育関係者が能代山本へ集結し、熱意ある研究討議がなされましたことに心より感謝申し上げます。

今年も各分科会では優れた発表が多く、分科会選考委員会では選出のための熱いディスカッションが繰り広げられました。そんな中、研修委員長から参加者全員に見てほしいとされた大曲乳児園の発表資料は大会終了後何度も読み返し、0歳からの子どもの育ちへの丁寧な関わりを改めて見直す良い機会となりました。

開会式で能代市長が、ボルチネのある牧師と子どもたちの出会いを例に、「家庭と社会全体で子どもに愛情をもって接していくことが大切である。」「行政でもバックアップしていく。健康で明るく夢をもって育つように、知恵と力を貸してほしい。」と私たちにエールを送ってくれました。まさに愛情こそがすべての子どもの最善の利益の保障だと思いました。子ども一人一人の内面を汲み取り、尊重し、保育者が皆同じ思いで子どもを理解し関わることで自己肯定感が育まれることは言わずもがなですが、このように研究討議の場に身を置くことで、各園、各保育者の意識の向上に確実に繋がり、本研究大会の意義を改めて実感したところであります。

橋本五郎氏の講演もやはり教育の中にある愛情の大切さを問うものでした。冒頭で高校時代の教師から言われた「汝何のためにそこにありや」は、私たちが今置かれている現状を踏まえつつ、何のためにここにいて、どう子どもたちと接していかなければいけないのか考えることなのだと深く感じました。橋本氏が人生の師との出会いから受けた多くの学びは愛情をもってしてのものだということが、心に穏やかにしみ込みました。講演後の参加者の表情からも一様に、満足感と穏やかな意欲が感じられました。

最後になりますが、今回の保育研究大会を無事終えることができたのも、能代山本地区の実行委員会の皆様の強力なチームワークによるものです。大会実行委員長としてこの場をお借りしてお礼を申し述べます。

また、分科会会場や駐車場を提供してくれた地域の各関係機関や近隣商店の協力にも感謝し、地域に支えられての開催だったことを実感しております。ご指導ご協力いただきました各関係機関と県保育協議会研修委員の皆さまにも感謝申し上げます。



第46回秋田県保育研究大会を終えて



秋田県保育協議会
研修委員長 白瀬 真紀子

平成30年度第46回保育研究大会が能代山本地区において、6月7日・8日の二日間にわたり行われました。

今回の研究大会は、発表園が研究テーマを決めて発表するという初めての大会でした。与えられたテーマではなく、日頃から園で研究していた成果の発表で、深めることができたのではないのでしょうか。発表された保育園の皆さん、当日園を代表して発表された保育士の方々、心から敬意を表したいと思います。ありがとうございました。

また、大会を運営するにあたり、能代山本地区の園長先生を始めとし、各園の保育士の皆様方には温かいおもてなしをして頂き、大会がスムーズに実りあるものとなりました。本当にありがとうございました。

さて、研究大会は分科会がメインであります。毎年時間が足りなく、もっと協議の時間があればいいのという思いがありました。そこで今回の大会より午前に発表を行い、午後の時間いっぱい協議の時間にしました。また、グループを決める際に研修委員が独自のアイデアを出し、和やかに始められたことで、協議を深めることにつながることができたのではないのでしょうか。

保育指針が改定された始めの年であり、養護と教育の一体化が示され、乳幼児の保育が重要視されました。私たち保育士が今までの保育を振り返り、取り組んできたことを自信を持って発表できた研究大会であったと思います。処遇改善、急激な少子化問題、保育士不足、働き方改革など問題が山積する中で、保育士一人一人が真剣に子どもたちと向かい合い、どうしたらもっと良い保育ができるだろうか、どうしたら子どもたちももっと成長できるだろう、保育士も子どもも楽しい保育とはなど、協議する姿は頼もしく、前向きに捉える保育士の皆さんにこれからの保育に思いを馳せることができた大会でした。

保育士の仕事は楽しくかけがえない仕事です。でもそこにはどうしたら良いのかと悩みが付きないうことが多くあります。しかし、この大会を通じて多くの仲間がいることを実感しました。これからも保育士同士、手を取り合って子どもたちの笑顔のために研究や保育に歩みをすすめていきましょう。

～交流会より～



「天空の不夜城」の灯籠と共に、
能代七夕睦会によるお囃子披露



迫力と感動の響き
長信田太鼓

第1分科会① ●子どもの育ちを保障する

新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者 47名

提案者 井上 美由紀 (秋田保育所副主任保育士) 助言者 山名 裕子 (秋田大学教育文化学部
子ども発達・特別支援講座准教授)
保坂 尚美 (秋田保育所保育士)
村田 信子 (中川保育園主査保育士)
大石 聡子 (中川保育園保育士)

【主な提案内容】

- 子どもの「主体性」に視点を置いて、環境構成(物的環境・人的環境)を見直し、様々な体験から「生きる力の基礎」が培われていくのではないかと、遊びの展開を追いながら研究した。その中で、環境構成の重要性について再確認し、またそれを見直していくことで子どもの遊びが充実したものとなり、様々な体験が一人一人の内面の育ちにつながったと考える。
- 「遊びから感性を豊かにするために」を研究テーマとして園内研修を重ねてきたが、友達や自然と関わる体験から五感が磨かれ、感性が豊かになって欲しいと考えた。魅力ある豊かな環境を構成し、気持ちを表現しようとする主体的な姿を温かく見守り、共感していくことで子どもの内面への理解が深まり、一人一人の思いに寄り添った関わりにつなげることができた。

【助言者から】

- 2つの発表の共通点として「イメージの共有」という言葉が出てきたが、子どもの年齢によっても、個々によってもイメージは違う。そこを読み取っていくこと、工夫していくことが大切。
- 子どもの見方について職員間で話し合いを持ち共有していく。10人職員がいれば見方も様々になる。
- 異年齢保育は、集団の人数や環境に関わらず、一人一人の充実感、自己肯定感を育てる遊びは何だろう?と考えて保育をすることが大切。
- 異年齢保育の中でも、「今は同年齢だけの時間」という制限があってもよいと思う。
- 子ども達は保育所以外の場で遊ぶ時間が減っている。また、親と話す時間も減っている。様々な経験がないと、主体性は生まれてこない。園で育ちを保障していく。

第1分科会② ●子どもの育ちを保障する

新たな時代の保育実践～すべての子どもにむけて～

参加者 33名

提案者 吉尾 久美子 (下川大内保育園主任保育士) 助言者 畠山 君子 (聖霊女子短期大学
生活文化科講師)
齋藤 好恵 (上川大内保育園保育士)
佐藤 由香 (川西保育所主任保育士)

【主な提案内容】

- 人との関わりが希薄化している現状をふまえて、同じ小学校へ就学する2園が様々な環境を整え、遊びを中心とした交流計画を立案。たくさんの実体験や関わりを広げていく交流を通して一人一人の心の動きを探り、子どもの成長を見つめた。今後、家庭や地域との連携を深め、時代にあった保育のあり方を探り、自己肯定感を育むことを目指した研究。
- 近年の核家族化や少子化に伴い、体を動かす楽しさを見失いつつあることから、運動遊びの年間計画を作成。運動遊びの工夫や地域との連携、保護者や子ども達への発信を通して生活リズムの安定を根底に、遊びから繋がる体力の向上を目指した研究。

【助言者から】

- 幼児期の教育は生きる力の基礎を育むことであり、その基礎は遊びで育つものである。

- 自己肯定感を育てる基礎は乳児期からの育ちが大切である。
- 運動遊びを通して地域の人との関係を大切にすることで、子ども同士の刺激も生まれ、育ちに繋がっていた。
- 子どもが健康で生き生きと生活するために、生活改善や生活習慣の見直しからもっていったのはとても良かった。また子どもから親へ発信したことやいろいろな声を大切にされた実践が良かった。
- まずは子どもの姿を見ることが大事である。そこから子どもを理解していかなければならない。
- 日々の保育の振り返りや教材研究をしていくことが子どもの興味・意欲・関心に繋がっていく。
- 子どもに何かをさせる時代ではない。学び考え工夫する力が求められている。そのためには、子どもの姿から今何が必要かを考えることである。

第2分科会 ●子どもの育ちを保障する 保育者の資質向上を図る

参加者 118名

提案者 矢澤 美幸 (尾去沢保育園保育士) 助言者 畠山 佳子 (秋田県比内支援学校 教諭(兼)教育専門監)
 宮本 琴美 (尾去沢保育園保育士)
 柴田 由紀子 (みたけ保育園保育士)
 西村 優子 (みたけ保育園保育士)

【主な提案内容】

- 配慮を要する子どもに対して職員全体の共通理解をうまく図れない、療育訓練の内容がうまく活かされていない、子どもの育ちに対する思いが保護者と違うなどの課題があげられた。子どもの現状や特性、支援の仕方について共通理解を図るため会議の持ち方や記録、伝達方法を工夫し関係機関や保護者と連携をすることで、子ども一人一人の理解が深まりより良い育ちにつながるのではないかと。
- “障害のある子もいない子も一緒に成長していけるように” 統合保育・インクルーシブ教育の考え方から一人一人に合った支援・援助をするという課題が見られた。これまでの様々な支援を必要とする子どもたちの保育実践を振り返り、職員間で考察を重ねることで共通理解を深め保育の質を向上させることが、すべての子どもの健やかな成長につながるのではないかと。

【助言者から】

- 全職員の共通理解のために独自のサポートカードや気づきメモを作って取り組んでいることが素晴らしかった。
- 支援体制を構築するためにコーディネーターを指名し、丁寧なケース検討会を実施している。
- 障がいがあっても現在も将来豊かな人生が歩めるように、乳幼児期に園と一緒に遊んでくれる先生がいる、頑張りを認めてくれる先生がいることが、好ましい行動を増やし、その子の幸せにつながる。笑わせることは、情緒を発達させるために有効である。たくさん関わり、いっぱい笑わせて欲しい。



第3分科会①●子どもの育ちを保障する 保育者の資質向上を図る

参加者 59名

提案者 成田 祥子（長木保育所主任保育士） 助言者 花田 一雅（秋田県教育庁幼保推進課
山田 美穂子（出戸こども園保育教諭） 指導班副主幹（兼）班長
奥山 由季世（出戸こども園保育教諭）

【主な提案内容】

- 子どもの多種多様な様子や行動をどのように理解して保育したらいいのか、という保育者の悩みに対し、ビデオカンファレンスを活用することで客観的に子どもの姿や内面を見つめて幼児理解を深める。更には職員間の共通理解を図ることで目的を明確にし、具体的な保育の手立てや環境構成の工夫が子どもの変容につながるという研究。
- 子どもの目指す姿を具体化し、記録やカンファレンスを通して子どもの内面や育ちの連続性の理解を深め、PDCAサイクルをもとに長期的に指導計画を見直してカリキュラム・マネジメントをしてきた。そうすることで、主体的に遊びを進める環境の構成や保育者の関わりに生かすことができ、たくましくいきいきと園生活を過ごす力へと還元することができるという研究。

【助言者から】

- 前年度・次年度の課題や悩みをテーマとして、仮説をもとに研究に取り組んでいた。
- 職員全員が研究に取り組むことで、個々の資質向上にもつながっている。
- 成果と課題を明確にしている。
- ビデオや付箋などを用いて日常的にカンファレンス（PDCAサイクル）を行い、継続した取り組みを行っている。
- 仮説に対するゴール（評価の基準・検証の方法）を第三者が見たときに分かりやすいようにすると説得力がある。
- 子どもの育ちを支える計画を形（文字）にすることが大切である。

第3分科会② ●子どもの育ちを保障する 保育者の資質向上を図る

参加者 46名

提案者 山谷 真紀子（すぎ保育園主任保育士） 助言者 浅野 直子（秋田県教育庁北教育事務所
俵谷 美和子（大曲乳児保育園保育士） 指導主事

【主な提案内容】

- 民間保育施設5園がコミュニケーション能力を育てる3つの力というひとつのテーマに向かって、保育士がコミュニケーションモデルとなり、言葉・体・心を柱として、各園で園内研修を実践し繰り返した研究である。
- 人間形成の基礎となる0歳児保育を基盤として、子どものキラリ発見ノートやエピソード記録を活用しながら、日々の保育の在り方や丁寧な関わりを見直し、子どもの内面理解へと繋げた研究である。

【助言者から】

- 5園の研究で共通していたことは、長い時間、保育園で過ごしている子ども達とどう向き合うか取り組んだ研修だった。一つのテーマを様々な切り口や考え方で取り組み、広がりがある研修だった。コミュニケーションとは、言葉だけでなく心と心、子どもの内面に入り込むことが大切である。
- 様々な問題を抱えている子どもの気持ちに寄り添い、共有することが保育の質の向上になる。保育者から見ると困った子かもしれないが、本当に困っているのはその子自身ではないか。心と心の繋がりを大切にしたい研究だったのでないか。先生と子どもの関わりから、子どもがほぐれ、保護者へも波及し、子どもと親の心もほぐれた。保育に真摯に向き合っている姿が見られた。
- 忙しい時間帯や保育者の都合や感情が優先した時に課題が見られた。一対一の関わりに限界はあるが、保育者がしなければいけないという気持ちからではなく、子どもの気持ちを汲み取ろうと

する保育者の意識や子どもの立場や目線になって考えるという姿に変わること、先生方が変わる。うれしいから伝えたいという保育者の意欲や保育の喜びにつながるのではないか。

- 良い保育とは何か？質の高い保育とは何か？と問い続けた答えは、子どもの姿、内面に寄り添い向き合うスタンスで、きめ細やかに取り組み行われている保育ではないか。
- 0歳児の日々の保育の基本となる授乳・離乳・おむつ交換など一つひとつに意味があり、養護と教育が一体となっていた。新指針の重点になっている0歳児保育の大切さは、保育の基本ではないか。子どもの内面を読み取る考察も素晴らしかった。

第4分科会 ●子育てライフを支援する 地域の子育て家庭への支援充実にむけて

参加者 30名

提案者 櫻山 まなみ (つぼみ保育園保育士) 助言者 蛭田 一美 (聖園短期大学准教授)
今野 まい子 (つぼみ保育園保育士)
西野 友絵 (白梅保育園保育士)

【主な提案内容】

- 育児について悩む保護者が多く、特に母親の不安が大きくなっており、子どもの育ちを支える為、様々な面からサポートする事が必要ではないか。その中で園の役割を考え、気持ちに寄り添った保育を目指した研究。
- 保育園にいる時間が長い事で親との関わりが持てずその結果、様々な子どもの姿が見られるようになった。そこから今後、保護者との関係を深め子どもの育ちを共有する事で、子育ての向上に繋がりたいと考えた研究。

【助言者から】

- 各園のサブテーマは、子育て支援の位置付けがしっかりできたもの（職員がしっかり理解しているもの）であり、また、資料の見やすさ分かりやすさは素晴らしかった。
- 園全体で保護者との信頼関係が築かれており、保護者の不安を汲み取れた事が大切なポイントで、それをチームで対応できた事が良かった。
- グループ講話をする際は、大人数ではなく、少人数で話しやすい場の雰囲気を提供していくと良い。
- 子育て支援とは、1) 保育の専門性を生かし従事する事が大切。2) 親への援助として「環境を整える」「関係を作る」「課題を知る」ことが必要。ちょっとした思いやりが支援につながる。3) やさしいまなざしを向け、援助をじっくり・ゆっくり・丁寧に。冷静な判断で親の背景を見る力や状況把握で親が何に困っているかを見極める事。

第5分科会 ●子育てライフを支援する 家庭や地域との連携による食育の推進

参加者 29名

提案者 杉本 瑞希 (こども園あきた風の遊育舎) 助言者 瀬尾 知子 (秋田大学教育文化学部
こども発達・特別支援講座准教授)

【主な提案内容】

- 三大アレルゲン（卵、牛乳、小麦）を一切使用しない給食。食物アレルギーの子どもがみんなと同じ給食を食べることができ、誤飲・誤食もなく安心できる食事へと繋げることを目指した研究。
- 子ども自身がみんなと同じものを食べる喜びを体験することができる「なかよしランチ」の必要性という仮説から食環境を深めた実践発表。

【助言者から】

- 平成17年の食育基本法ができてから、クッキングやイベントなどを行う園が多かったが、日々の食事が大事であると感じさせるような研究発表であった。
- 苦味や酸味は、子ども達にとって苦手な味とされているが、好きではない食べ物でも繰り返し出したり、味付けの工夫、保育士の働きにより食べてみようとする傾向が見られた。
- アレルギーを持っている子が疎外感を持たないように、みんなで一緒に食べる環境を保育士がつ

くることが大切である。

- 「みんなで食べるとおいしいね」と気持ちに関連づけながら温かい雰囲気の中で食べることが重要。
- 保育士と栄養士が連携して子ども達のニーズに近づけていけるような支援が必要。

第6分科会 ●多様な連携と協働をつくる

子どものより良い育ちに向けた関係機関とのネットワーク

参加者 5名

提案者 三浦 裕 (かみこあに保育園保育士) 助言者 時田 淳子 (秋田県教育庁幼保推進課
指導班指導主事)

【主な提案内容】

- 保育園と小学校の生活の違いから子どもが戸惑っていることを知り、一村一園一校のメリットを活かした実践研究。
- 毎年カリキュラムの見直しをする中で、連携・交流の成果と課題を確認し合い、互いの保育や授業の改善を図ることで、就学前教育から小学校教育へのスムーズな移行につながると考えた研究。

【助言者から】

- 地域のメリットが生かされた内容だった。
- 保護者との連携が大切だということに気付いたので“保護者が子育てって楽しいな”と思えるアプローチをする。
- 読みたくなるようなおたより、連絡帳の工夫、子どもの成長が伝わる記入をすると良い。
- 就学前から小学校教育へ、遊びの中で自然に学ぶ経験があり、見通しを持った取組みがなされている。

第7分科会 ●子育て文化を育む

保育の社会化にむけて～保育の営みをいかに社会に発信するか～

参加者 28名

提案者 小林 瑞葉 (琴丘保育園保育士) 助言者 上田 智子 (秋田県次世代・女性活躍支援課
副主幹 (兼) 班長)
吉田 友美 (琴丘保育園保育士)
筒井 久美子 (サンパティオこども園保育士)
吉田 麻里 (サンパティオこども園保育士)
古谷 愛美 (サンパティオこども園保育士)

【主な提案内容】

- 人と人との関わりの中で心動く経験を増やしていくことで、子どもたちが相手の気持ちを考えた関わり方を知り、自分が役に立つ喜びを味わえるようにと願い計画した実践研究。
- 地域との交流の中で子どもたち一人一人が人と関わることの楽しさや感じる喜びに気づき、地域と共に健やかな育ちを目指した研究。

【助言者から】

- 継続させているからこそ、多岐に渡って交流できていることが素晴らしい。
- 交流することで、子どもたちがどうしたら喜んでもらえるかを考え、感謝されるという経験は自己肯定感を育む。
- 園生活に交流行事を過度に取り入れたり、出来栄に過重な期待をしないで活動してほしい。
- 秋田市中心部にある新設の園舎で、地域に根差した発表をすることが挑戦だったと思う。交流先の計画、受け入れて頂く働きかけが大変だったのでと思う。地域の方々との出会いをきっかけに、地域の応援団を増やして行ってほしい。一回限りでなく、積み重ねて行ってほしい。

第62回 北海道・東北ブロック研究大会へ選考・派遣された提案者の方々

分科会	園名	提案者	発表テーマ
1-B	秋田保育所 (ひまわり保育園)	主任保育士 保坂 和美 副主任保育士 井上 美由紀 保育士 保坂 尚美	「遊び込む」を生み出す 保育環境
1-B	下川大内保育園 上川大内保育園	主任保育士 吉尾 久美子 保育士 齋藤 好恵	つなげよう手と手 つたわる心と心
2	尾去沢保育園	保育士 矢澤 美幸 宮本 琴美	子どもの心のよりどころ である保育園を目指して
3-A	出戸こども園	保育教諭 山田 美穂子 奥山 由季世	いきいきと遊ぶ楽しさや 遊びをすすめていく 喜びをめざして
3-A	大曲乳児保育園	保育士 俵谷 美和子	保育者の資質向上を 目指して
4	白梅保育園	副主任保育士 西野 友絵 保育士 中野 優美子	「あしたも笑顔で」
5	こども園 あきた風の遊育舎	栄養士 杉本 瑞希	「なかよしランチ」で つながる笑顔
6	かみこあに保育園	主任保育士 松岡 環裕 保育士 三浦 裕	「つながる子どもの育ち」

第61回 全国保育研究大会 ご出場 おめでとうございます！

かみこあに保育園 「つながる子どもの育ち」

～地域で共に考える子どもの育ち～ 第8分科会にて発表となります。

編集後記

第46回秋田県保育研究大会では担当地区実行委員として大会準備に携わりながら、広報委員としても“二足のわらじ”を秘かに履き、第53号瓦版の発行に向けて準備を始めておりました。原稿依頼を快くお引き受けくださいました先生方に、深謝申し上げますとともに、寄稿いただいた文面を読み、回顧しながら完成の運びとなりました。

保育研究大会の記念講演で、橋本五郎氏は、恩師から受けた「汝、何の為に其処に在り也」の言葉を胸に刻んでおられることを熱く語っておられました。この言葉は、私の心にも響き『広報の任務は向いていない』と思いながら取り組んでいた一年目を反省し、常に「汝、何のために其処に在り也」を、広報委員一人一人が『断言できる自分である』二年目にしたいと思えます。

(広報委員長 大坂江利子)



広報委員名

担当副会長	田中 真由美 (毛馬内保育園)
広報委員長	大坂 江利子 (八森子ども園)
広報副委員長	加賀屋 寛子 (かわしり保育園)
委員名	阿部 明子 (大湯保育園)
	斎藤 玲子 (綴子保育園)
	宮腰 真澄 (船川保育園)
	石田 義成 (白百合保育園)
	福井 洋子 (岩見三内保育所)
	金子 久美子 (下川大内保育園)
	戸嶋 富美子 (おおたわんぱくランド)
	伊藤 貢子 (三重保育所)
	佐藤 浩子 (にしもないこども園)